

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20500511

研究課題名（和文）大学における民間を活用した地域貢献と野外教育指導者養成の連携モデルの創造

研究課題名（英文）The development of connective model between the service of outdoor program to local community and the substantiality of outdoor leadership curriculum in university

研究代表者

岡村泰斗（OKAMURA TAITO）

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・講師

研究者番号：20335467

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、大学の地域貢献とカリキュラムの充実の関連をモデル化するために、民間団体と連携した野外教育プログラムの効果要因を検証すると共に、大学生の指導実践と大学カリキュラムの関連を評価することであった。本研究では平成20年度から22年度にわたり、民間団体の主催する12コース、キャンパーのべ301人、大学生スタッフのべ117人を対象とした。キャンパーを対象に自然体験効果尺度と、効果要因を探るためのMeans-End調査を実施した。大学生を対象としてWilderness Education Associationの開発した18ポイントカリキュラムに基づく指導スキル評価シートを指導実践前後で実施した。その結果、キャンプの効果として、人間関係や自然認識に高い効果が実証された。さらに、これらの効果の要因として原生自然体験、冒険活動体験が最も多く挙げられた。一方、これらの指導実践経験が大学生の指導スキルに及ぼす効果として、野外生活技術、野外活動技術のハードスキルが常に高く、意志決定・問題解決、リーダーシップ、コミュニケーション、グループダイナミクス、教授法のソフトスキルに対する効果は、指導経験内容に影響を受けて向上することが明らかとなった。一方、環境倫理、健康・公衆衛生に中程度の効果が認められ、リスクマネジメント、山行計画、自然・文化史は、キャンパーの直接指導に当たるカウンセラー経験では向上しないことが明らかになった。以上の結果から、民間の野外教育プログラムの企画・運営・指導に野外教育を専攻する大学生が参画することにより、より高度な地域サービスが行えることと、大学生に対し継続的かつ漸増的な指導実践を体系化することの必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to determine the outcome factors of camp experience for youth and to evaluate the effect of camp leader experience of university students in order to create the cooperation model between the service to local community and the substantiality of curriculum of university with outdoor education major. The subjects were 301 camper and 117 university students who participant 12 camp courses operated from 2008 to 2010. The Camp Outcome Scale and Means-End investigation were tested after the each camp for campers. On the other hands, the Leadership Skill Evaluation Form based on 18 points curriculum of Wilderness Education Association were administrated for university student leader through their leader experience. The collected data showed that nature concern and relationship were most effective outcome of camp experience. Furthermore, the wilderness and adventure experiences were pointed out high frequency as outcome factor. As the effect of leadership experience on student's skill, outdoor living and activities skill were improved after each leader experiences. The soft skills, such as decision-making & problem solving, leadership, communication, group dynamics, and instruction, were obtained depending on the context of the leadership experience. On the other hand, environmental ethic

and health & sanitation were improved medially and risk management, trip planning, and natural & cultural history were not changed by leadership experience. The result figured that the outdoor program planed and leaded by outdoor major students contributed to more effective local service. The discussion suggested that university should provide continued and promoted leadership experience for students.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
20年度	1,200,000	360,000	1,560,000
21年度	1,000,000	300,000	1,300,000
22年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学

キーワード：野外教育、教育効果、効果要因、指導者養成、地域貢献、民間団体、大学カリキュラム、指導実践

1. 研究開始当初の背景

青少年の健全育成のために自然体験の提供の必要性が叫ばれている。しかしながら、これらの事業を担う指導養成において、我が国の高等教育機関では、十分な体系化には至っておらず、かつ、大学カリキュラムにおいて豊富な指導実践の機会を提供することにも限界がある。一方、近年、大学における研究成果に基づく地域貢献が期待されており、今後大学の人材及び情報の活用の仕組み作りが急務である。そのため、本研究において、野外教育に関する教育課程を有する大学と野外教育プログラムを提供する民間団体が連携することにより、大学の地域貢献、有能な野外指導者育成、及び調査研究の促進の連携モデルを構築することは、野外教育の分野のみならず、今後の大学の地域貢献及び産学連携にとって意義のあることである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学における地域貢献を活用した野外教育指導者養成カリキュラムのモデルを作成することである。そのために、課題1として、大学において専門的に野外教育を学ぶ大学生、大学院生が、民間団体のプログラム開発、運営、指導、評価を行うことで、参加青少年に対する野外教育プログラムの教育効果を検証する。課題2として、これらの指導実践が大学生の指導スキルに及ぼす効果を明らかにし、大学カリキュラムの関連性と効果を評価する。

3. 研究の方法

民間団体幼少年キャンプ研究会の主催において、カヌー、クライミングを含む長期継続型デイキャンプ及び、冒険登山を含む長期滞在型キャンプの企画、運営、指導に参画しプログラム開発を行った。調査対象者は、全12コース、キャンパーのべ301人、大学生スタッフのべ117人(平成20年度:7コース、キャンパーのべ145人、大学生スタッフのべ62人、21年度:6コース、キャンパーのべ128人、大学生スタッフのべ47人、平成22年度:1コース、キャンパー28人、大学生スタッフ8人)であった。課題1を達成するために、これらの事業に参加したキャンパーを対象として自然体験効果尺度(谷井ら, 2001)と、効果要因を探るためのMeans-End調査を実施した。課題2を達成するためにWilderness Education Associationの開発した18ポイントカリキュラムに基づく指導スキル評価シートを作成し、指導実践前後で実施した。

4. 研究成果

課題1について、野外教育を専攻する大学が企画、指導する長期継続型デイキャンプ及び長期滞在型キャンプによって、人間関係や自然認識に高い効果が実証された。さらに、これらの効果の要因として登山、カヌー、クライミングなどの原生自然の中で行う冒険体験が挙げられた。また、環境リテラシーの獲得には、原生自然体験が、総合的な環境リテラシー獲得の要因となっていることが明らかになった。

課題2として、本研究の指導実践を通じて、大学生の野外生活技術、野外活動技術のハードスキルが常に向上し、意志決定・問題解決、リーダーシップ、コミュニケーション、グループダイナミクス、教授法のソフトスキルに対する効果は、指導経験内容に影響を受けて向上することが明らかになった。一方、環境倫理、健康・公衆衛生に中程度の効果が認められ、リスクマネジメント、山行計画、自然・文化史は、キャンパーの直接指導に当たるカウンセラー経験では向上しないことが明らかになった。

以上の結果から、野外教育を専攻する大学生が計画、指導した原生自然体験、冒険活動体験が、青少年に対するキャンプの効果の要因となった。また、大学生のハードスキルは、指導経験によって安定的に向上したが、ソフトスキルを向上させるためには、継続的な指導実践、及びマネジメントスキルを向上させるためには、漸増的に高い責任を伴うような指導実践の体系化が必要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計9件)

1. 岡村泰斗, 岡田成弘, 荒木恵理, 2009, Means-End Analysis を用いたキャンプ効果の要因の検討. 日本キャンプ会議 2009 (東京).

2. 荒木恵理, 岡村泰斗, 中野友博, 黒澤毅, 2009, 冒険キャンプにおけるキャンプ場面ごとのふりかえり体験の比較. 日本キャンプ会議 2009 (東京).

3. 岡田成弘, 岡村泰斗, 2009, 組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連. 日本キャンプ会議 2009 (東京).

4. 岡村泰斗, 岡田成弘, 荒木恵理, 2009, Means-End Analysis を用いたキャンプ効果の要因の検討. 日本野外教育学会第12回大会 (釧路).

5. 荒木恵理, 岡村泰斗, 中野友博, 黒澤毅, 2009, 冒険キャンプにおけるキャンプ場面ごとのふりかえり体験の比較. 日本野外教育学会第12回大会 (釧路).

6. 岡田成弘, 岡村泰斗, 2009, 組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連. 日本野外教育学会第12回大会 (釧路).

7. 岡村泰斗, 岡田成弘, 荒木恵理, 2009, 自然への回帰: キャンプが環境リテラシーに及ぼす効果とその要因. 日本環境教育学会第21回大会 (東京).

8. 岡田成弘, 岡村泰斗, 2009, 組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連. 日本環境教育学会第20回大会 (東京).

9. Taito OKAMUAR and Masahiro OKADA, 2010, The Meaning of Wilderness Experience in the Japanese Organized Camping. Wilderness Education Association 2010 National Conference on Outdoor Leadership (USA).

[図書] (計1件)

岡村泰斗(2009)キャンプの効果を高める環境とは, 社団法人日本キャンプ協会編, キャンプデータブック 2009, 社団法人日本キャンプ協会, 東京, p.2.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡村泰斗 (OKAMURA TAITO)

筑波大学・大学院人間総合研究科・講師

研究者番号: 20335467